出場最年長優勝

PO制し、九州初タイトル

《第３３回九州ミッドシニア選手権競技》

～伊都ゴルフ倶楽部

通算３オーバー　１４７

佐々木　徹（くまもと中央、７９歳）

ルックス、歩く姿、そしてゴルフのプレー。とても来年８０歳を迎える選手とは思えない。その佐々木が大会出場最年長での優勝を果たした。記録が定かではないが、７９歳での頂点は九州ミッドシニア選手権での最年長Ｖと考えられる。

７２歳の２０１９年に日本ミッドシニア選手権を制した実力者にとって九州初タイトル。優勝後の感想は実に淡々としていた。「今年（競技ゴルフを）そろそろ終わろう

か、と思っていた。７９歳でいい思いができた。幸せ者です。勝ったのは嬉しいけど、『何が何でも』とか『いけるかも』とかは全くなかった。ただ、自分のできることを丁寧にやろう、と」

最終日は雨中の闘いとなる。首位から３打差の８位タイでのスタート。１番で３・５ｍを沈めて、いきなりバーディー。３番ロングでは残り１１０ヤードの第３打をＰＷで直接放り込んでイーグル。アウトを出場７１人中ベストの３３で折り返した。「後半はしっぺ返しがくる」との予想が悪い方に当たり、インはノーバーディー、３ボギーの３９。ただ、前半の貯金が効いてベストスコアタイの７２でホールアウトした。

通算３オーバー１４７。同スコアで６６歳の白坂千弘（宮崎大淀）とのプレーオフに持ち込まれた。１８番ミドル→１２番ミドルの繰り返しで演じられる予定だったが、決着は１ホール目であっさりついた。３オン２パットのボギーの白坂に対して、佐々木は２オン２パットのパー。

ここ数年「ろくなゴルフができなかった」と胸鎖関節炎に悩まされた。アドレスができない。いつ痛みが襲うかも分からない。不安にかられ、プレーに集中できない。そのやっかいな病が治癒し、「自分の思うような練習」ができ始め、大会１カ月半前から毎日クラブを振り続けた。その成果が優勝という形に表れたのである。

群馬県藤岡市生まれ。３歳時に神奈川県に移り、日体大では体操の選手として活躍した。あん馬を得意とし、大学４年時には主将としてインカレで団体優勝。１年後輩には「オリンピックトリオ」の塚原光男、監物永三、岡村輝一の３人がいる。「私は二級品でした」と謙遜するが、佐々木自身もナショナルメンバーの一員に入った経験を持つ。ゴルフと体操の共通点について「イメージ」を挙げる。イメージしながら次の動きをしていくわけである。異なる点は「ゴルフはラッキーや運があるけど、体操にはない。心技体が欠かせない。苦しい」と説明した。

ゴルフは教員時代の４０歳前から始める。競技ゴルフは６０歳から取り組み、１年間、真名ＣＣ（千葉県茂原市）近くにマンションを借りて同コースで猛練習に励んだ。６１歳時に息子の住む熊本に転居。同時に、くまもと中央ＣＣのメンバーに。「みんなのレベルの高さに魅せられて」より一層プレーにのめり込む。

ゴルフの魅力について「体力が落ちてもやっていける。それが嬉しい。競技もプライベートも楽しい」とにこやかに答えた。２度目の優勝がかかる日本ミッドシニア選手権には「年齢が年齢だけど、どこまでやれるか試してみたい。自分がどう変化していくか楽しみ」と１１月の舞台を見据えた。